2012年12月22日（仮）

尾澤恒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０１２年１２月２２日（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１８９１ＢＡ

【作者名】
尾澤恒

【あらすじ】
現実にファンタジーの世界を取り入れた作品になっていく予定です。
ちょっと変わった人たちが集まって
世界を変えていこうといったファンタジーです。
いろいろなジョブを登場させようと思います
そしてちょっとした時事問題や歴史的要素も取り込もうと思います。
楽な気持で読んで頂ければ幸いです。

プロローグ

２０１２年１２月２２日　その日全てが変わった。

とあるブログにて

みなさん
今年も残りわずか
クリスマスも近いこの時期になると
彼女がほしくなりますね（笑）
これを言い続けて、早６年
ＰＣの前のあなたはどうですか？

さて、ここで話は変わりますが
明日は、今話題？の“マヤ暦”で予言されている
第４の文明が終わり
第５の文明が始まる日、だそうです。

明日は何かが起こるのでしょうか？
わくわくしますね（笑）

ヒャッホゥウ

すみません
舞い上がりました（照）

それではまた明日

☆ァディオス☆（、・ω・´）ノ

２０１２／１２／２１

俺が外の喧騒によって目が覚めたとき、すでに世界は変わり始めていた。

「なんだよ。うるさいな。」

外を見るとパトカーやら野次馬やらであふれかえっていた。これは野次馬を体験できるいい機会だ。やってみるか。

「何か、あったんですか？」

「あら、小森さん。お久しぶりね。今朝起きてごみ出ししようと外に出たらね、道路にいくつも扉があったのよ。不思議に思わない。それで警察にでんわしってわけなのよ～。それでねこの話には続きがあって、」

「へぇ～、そうなんですか。ありがとうございます。」

危ない危ない人生初の野次馬がいやな思い出になるところだった。人選ミスったな。でもさすが俺、引きこもりがちで常日ごろからあまり人とかかわっていない俺だからこそなせる技だな。うん。常人ならば、あのおばさんの長話に延々と付き合わされていただろう。

まあ、なんとなくだが何かが起こっている事は確かだろう。俺自身気になることもいくつか出てきたしな。ここは文明の利器で、俺の宝であるパソコンを使うほかないだろう。インターネットのニュースによると世界各地で同じような現象が起きているようだ。さらにはマヤの予言的中かというような見出しの記事まで出ていた。これ

はもしかすると俺のブログである“大洋のつぶやき”も何かしら反応が出ているのではないか？そう思い開いてみると、そこには見たこともない光景が広がっていた。

「ブログ炎上来たー！！こ、これが芸能人や限られた一部の人間だけが体験できるという、あれか！！！」

そこにはみんなの疑問や感情が書き殴ってあった。

それだけみんなテンパっているということなのだろう。それはそうだ。俺だってテンパっているのだから。しかし実際体験してみると一体これはどうしたものか？ふむ考えること13分俺は一つの結論を下した。

『皆さん、少し落ち着きましょう。私だって何が何やら分からない状況なんです。だから協力しませんか？我々の聖地である秋葉原に集まりましょう。今日の12時に待ってます。』

そう書き残し俺は部屋を出た。電車ちゃんと動いているかなと思いながら。

プロローグ（後書き）

はじめまして尾澤恒です
この作品？が私にとっての処女作になります
まだまだ拙くて見切り発車のような
気もいたしますが
皆様よろしくお願いいたします。

1話

着いた。秋葉原駅前だ！さすがは日本の鉄道職員だ。こんな異常事態でもちゃんと電車を動かしていることに拍手だ。　招集かけた手前もあって、1時間前に来てみたが早く着きすぎたかもしれない。だが集合場所を見ると6人の若者がいた。これはもしや、本当に集まってくれたのだろうか？

「あの、もしかしてブログを見て、きてくれたかたがたですか？」
スーツ姿の佐々木が答える。
「そうですが、あなたがあのブログの管理者さんですか？」
「はい、まあそうですけど。」
「私普段はレアヴロード社に勤めております。佐々木誠と申します。いつもあなたのブログを拝見させていただいております。今日は会えて光栄です。」
「ご丁寧にどうもありがとうございます。えーと、俺は作者の小森大洋（たいよう）と言います。早速ですがこれ以上人数もあっつまらないと思いますし、どこかに移動して何か食べながら話しましょうか。」
このメンバー唯一の紅一点、黒髪ショートでぱっちりとした目が勝ちきそうな雰囲気を醸（かも）す池田が口を開いた。
「あの、自己紹介とかはしなくていいんでしょうか。」
「大丈夫ですよ、池田さん。俺、みなさんの名前知っていますし。」
「どうして私の名前を？しかも、それってどういうことですか？」
「まあそれについてもみなさんと話したいことなんですが、とりあえず座って話せる場所を探しましょうよ。」
「わかりました。」
納得のいかない表情で池田はうなずいた。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。さて先ほどの事を疑問に思っている方がいるので、そのことについて話しましょうか。これから話すことは嘘と思うかもしれませんが、紛れもない事実です。あと、俺の分かることは正直に話しますんで、みなさんもよろしくお願いします。」

「はい。」

「分かりました。」

「いいですよ。」

「分かった。」

「ういっす。」

「・・・・・・」

「よし、じゃあはじめに俺にはみなさんの頭上にゲームのステータスが見えます。」

「えーと、本当ですか？」

「最初に言ったはずですよ、正直に言うと。つまりこんな感じです。」

池田由希（ゆき）　２０歳　空手家Ｌｖ３２　Ｈｐ１３５（ヒットポイント）　Ｓｐ１０９（スキルポイント）
佐々木誠　２８歳　会社員Ｌｖ３８　Ｈｐ１５５　Ｓｐ１２８
上沼健太（かみぬま）　１７歳　剣士Ｌｖ２２　Ｈｐ１６５　Ｓｐ９８
高山祐樹（ゆうき）　１９歳　学生Ｌｖ３８　Ｈｐ１０２　Ｓｐ１５９
松田佑磨（ゆうま）　１９歳　学生Ｌｖ１８　Ｈｐ１２４　Ｓｐ１１１
吉野元喜（もとき）　２１歳　ゲーマーＬｖ５１　Ｈｐ１１９　Ｓｐ２１９

「と、まあ。こんな感じで俺には見えるわけだ。たぶん名前も間違ってないはずだ。どうかな？」

「「「「「「・・・・・・。」」」」」」

「やっぱり信じられないかな？でもこれを納得してもらわないと、藩士が先に進まないんだが。・・・・。」

「いや、僕は理解できるよ。」

どう見てもオタクルックスの吉野が賛同する。
「ホントですか!?吉野さん。」
「もちろんだよ。小森氏。なぜなら僕にも見えているからね。」
「えっ。」
「小森氏の言うことが正しければ、僕たちには共通点があるね。」
「共通点ですか?」
「うん。じゃあ今度は僕の見えているものを教えよう。」

小森大洋　２０歳　ゲーマーＬｖ９９　Ｈｐ２０２　Ｓｐ３８８

「Ｌｖ９９かよ。パネッす。小森先輩。」
短髪・茶髪・高身長の上沼が言った。
「いや～それほどでもあるかな。実際ゲームはかなりやりこむしな。そういう上沼だって剣士なんてカッコいいじゃないか。」
「自分は剣道やってるからだと思うっす。でもこれおかしいっすね。」
「そうだな。みんなゲーマーだなんだである前に学生であり社会人であるはずなんだが。う～ん。吉野さんはどうおもう。」
「残念ながら小森氏、僕にもわからないな。」
「いや、これは。ふむ。吉野さん、小森君。それぞれみんなの特徴を表しているのではないかな?僕の場合はとても勉強して東京都の頭のいい大学に入学することができたからね。つまり、ぼくの得意分野は学業だよ。」
　ちょっと癪（しゃく）に障るが、知的な感じの高山は眼鏡をクイッと上げながら言った。
「そーか。じゃあ俺はゲームに命かけてるからゲーマーか。上沼とか池田さんはどうなるんだ。」
「自分は勉強が嫌いなんで、とりあえず剣道してるってカンジっす。」
「私は、勉強は嫌いじゃないけど、空手をずっと続けてるからかな。

」
「少し、解決してきたな。じゃあこのＬｖの差はなんだ？」
「おそらく各々が自分の好きなことにどの位重きを置いているかによって、変わるのではないか？」
「やっと納得出来た。俺は他に好きな物もないし、勉強もそれほど好きでもないから、Ｌｖも低いのか。」
うわっ初めて喋ったよ。危うくいるかいないか分からなくなるところだった。背もそれほど高くないし、太っているわけでもなく、そして髪型も突飛な感じでもない。どっからどう見ても影の薄い普通な感じの青年だな。
「そういうことになるな。ではなぜこんなことが起きているのか？ということだが、これは扉の出現が関わっているんじゃないかと思うんだが、どうだ？」
「その考えで問題ないと思いますよ。私はそこで、扉の調査に向かうことを提案いたします。」
「それはいいですね。ところで佐々木さんはスーツですけど、会社のほうは大丈夫なんですか？」
「心配には及びませんよ。私の会社は新聞を売って、利益をあげているんですが、こういった事態なので記者ではない私にまで声がかかりまして、急きょ取材に駆り出されました。困っていた私の前に現れたのがあるブログでした。そしてここに皆さんが集まるというので、お話をうかがいに来たというわけです。いやはや、皆さんの発想想像は目を見張るものがあります。よろしければ正式に取材を受けてくださいませんか？」
「あなたがここに来たのは、そういう魂胆（こんたん）がありましたか。でも受けたところで俺たちにどのような見返りがありますか？」
「人聞きの悪いことをおっしゃられますね。そうですね、見返りですか。協力していただけるなら、ここでの食事代やその他必要経費、新たな発見があった場合は私が上層部と交渉してそれに見合う報酬を用意させましょう。これでいかがですか。」

「ふむ、俺とは利害関係は一致しますね。でも本当に報酬は用意できるんですか？」
「報酬については心配しなくていいですよ。私交渉技術には定評がありますので。では他の方々のいかがですか？」
「俺は他にやる事ないんでやりますよ。」
「金もらえるんなら俺やるっす。それに今がどうなているかも気になるっすから。」
「アタシもここまで来て何もしないはちょっと嫌だな。」
「僕もその意見に賛同するよ。」
「僕はこれにはリアルＲＰＧの匂いがするからぜひ参加したいね。」
「そうですよね。吉野さん、そう思いますよね。夢にまで見てましたから、わくわくしますよね。よしっ、話は決まりましたよ。佐々木さん。」
「そのようですね。皆様ありがとうございます。それでは腹ごしらえと行きましょう。皆さん存分に召し上がってください。」
俺たちは運命の歯車はここから動き始めた。

2話

扉の前までやってきた俺たちは扉にＫＥＥＰ　ＯＵＴと黄色のテープが巻かれているのを目にした。

「まあ、これはあれだよな。触れるなっていう警察からのメッセージだよな。みんなどうする？」

「先輩、まだテープが巻かれていない扉探しましょうよ。これだけいろんなところにあるんスから、探せば出てきますって。」

「うん、そうだな。じゃあ佐々木さんはここらへの店の人に聞き込みに行って下さい。俺たちは手分けして探そう。あと、見つけた時のためにここで一度連絡先を交換しようか。」

みんなが頷いて交換完了！よしっ！池田さんのアドレスゲット！初めての女の子連絡先だ、わ～い。ごほん。

「じゃあ一旦解散。健闘を祈る。」

見つからないし連絡も来ない。かれこれ2時間近く歩いているのに全然見つからない。そんなことを考えていると妙な感じがする。今何を考えていたのだろう。2時間も歩いてるのか、ふむ妙だな。普段ならこんなに歩けば多少の疲れも感じるはずなんだが。気のせいだろうかまったく疲れた気がしない。そういえば、昨日も遅くまで起きていた割には今日は早く起きれたし、いつもある倦怠感（けんたいかん）もない。これは謎だ。疑問だ。池田さんに連絡できる口実ができた。いや違う、これは断じて違うぞ。そういうやましい気持ちがあるわけではない。ただ純粋に疑問を解決したいだけなのだ。そう思い携帯を手に取る。

ん？気がつかなかったが不在着信が入っていた。

「もしもし、小森ですけど、どうかしましたか？」

「ああ、小森さんですか。聞き込みしてたらね扉見つけましたよ。申し訳ありません。手間取ってしまって。」
俺は思わず空を見上げた。もう少し時間かかってもよかったのに。
「？　どうかしましたか？」
「いえ、なんでもないですよ。じゃあ早速集まりましょうか。」
「わかりました。他のみなさんには先に連絡してありますので、ご心配なさらずに。」
「了解です。すぐにそちらに向かいます。」

結局、連絡できなかったな。もしかして、あの男わざとやっているのだろうか？まあいい。早く集まらねば。待たせてしまって印象を悪くしてはいけない。

「すみません。遅くなりました。」
「いえ、大丈夫ですよ。アタシ達もさっき着いたとこですから。」
おぉ池田さんがかばってくれたのか？うれしい、とてもうれしい。
「ありがとう。では早速ですが、その扉はどこに？」
「この店の裏です。店主には許可を取ってありますので行きましょうか。」
「行こう。」

「これが各地で出現している扉か、普通の家にあるような扉と変わりないよう見えるんだがな。」
「ふむ、確かにそうだね小森君。しかし触れたりしてみたらどうだい。」
「あぁそうだな。よしっ触ってみるか。」
「ファイトっす。先輩。」
「頑張って小森君。あと気をつけてね。」
しゃあっ。悪くない気分だ。女の子に応援されるとここまで違うことなのか。今なら何でもできそうな気がする。いくか、扉に手を

あててみる。何も起こらない。開けてみるか。ガチャッと鍵が開く音がした。
「よしっ。開けるぞ。みんな準備はいいか。」
「うん。」
「うっす。」
「ええ。」
「問題ない。」
「「・・・・・。」」

扉を引く、その先には見慣れない風景が見える。次の瞬間その風景が目の前にあった。

「ここはどこだ？そうだ、みんないるか？」
「みんないるよ。」

そうか、ならいい。それから俺たちは少しの間放心状態あったと思う。今俺たちがいる場所は入ってきた扉と腰の位置まで丈のある草が生い茂っている、草原に立っていた。俺は今までこれほど風が気持ちがいいと思ったことはない。まるで童話の世界にでもいるかのようだ。

「さてみんな見惚れるのはこの辺にして、これからの事を考えないか。佐々木さん、これは新発見とよんでもいいんじゃないですか？」
「えっ、あぁ。そうですね。これは大発見ですよ。皆さんご協力ありがとうございます。」
「いやそれほどの事じゃないですよ。ものは相談なんですがね、報酬の件はいくら位になりそうですかね？」
「上と話してみないと分かりませんが、少なく見積もって１０万。反響によってはもっといきますね。でも情報は鮮度が命なので、私はこれからすぐに戻って記事を書こうと思います。」

「分かりました。ではまた何か分かったら連絡しますよ。」
「ほんとですか！？ありがとうございます。報酬のほうは任せてください。」
「頼みましたよ。じゃあこれから俺は探検するけど、みんなはどうする？」
「アタシも見てみようかな。」
「俺も。」
「僕は今日は遠慮させてもらうよ。また今度誘ってくれ。」
「おう、わかった。他は？」
「自分先輩にお供するっす！」
「おっ、おう。じゃあ吉野さんは？」
「僕は勿論参加するさ。面白そうだからね。」
「よし決まりだな。俺と池田さん、上沼、松田、吉野さんの5人か。こっからが本番だ。きをひきしめていこう。」
「それでは私たちはここで失礼いたします。」
「じゃあまた。今度は一緒に探検しましょう。」
「小森君、上沼君くれぐれも気をつけるんだよ。」
「ちょっと待て、俺も上沼と同じに思われてんのか。俺は筋肉バカじゃねぇぞ。」
「先輩、自分の事そんな風に思ってたんスんね。」
「きみをそこまで馬鹿だとは思ってはいないが、きみが気を抜いたらみんなが危険に晒されるんだよ。それは分かっているね。」
「驚くほど自然にスルーっすか。」
「大丈夫だよ。上沼君。頭を使わなくてもなんとかなるって。」
「いや、池田先輩それ励ましになってないっす。はぁ～」
「えっ。なんでだ？」
「だから君は抜けているんだ。さっきから君はリーダーっぽい感じを出しているじゃないか。上に立つ以上はちゃんとしろということだ。」
「そういうことか、それなら心配ないぞ、俺が気をつけなくてもみ

んな、なんとかなるだろうし。きっとうまくいくさ。」
「ふぅ、きみの楽観さ加減にはついていけないな。でも僕がさっき言ったことはちゃんと覚えておくんだ。いいね。」
「あぁ、わかったよ。それじゃあな。」
「それではみなさんお気をつけて。」
「失礼する。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1891ba/

2012年12月22日（仮）

2012年1月5日21時52分発行